

(研究ノート)

明治期新華族周辺における妻と妾

—円地文子『女坂』から—

森岡清美

筆者は1998年から2000年にかけて、華族社会の娶妾に関する研究成果をこの『研究紀要』に連年発表した。すなわち、「一勲功華族における妻と妾—男爵尾崎三良の場合—」(1998)、「明治初期の華族社会における妾」(1999)、「華族社会と娶妾習俗の崩壊」(2000)である。この3点の論文を基礎として、拙著『華族社会と「家」戦略』(2002.1)の第三部 華族社会と娶妾習俗 を構成したのだが、そこにも吸収できなかった未刊の考察をここに発表する。

この研究ノートは、上記3点の論文のなかでは第一論文に接続するものであるが、主人公が新華族でなく士族官僚であり、資料源が日記や自伝でなく小説である点でそれとは異なる。しかし、明治期の新華族周辺における娶妾を当事者の心理に踏みこんで理解する一助になることだろう。

× × ×

資料とした小説は円地文子『女坂』[1957]である。作者自身、『女坂』の作中人物にかなり近いモデルが彼女の近親にあったといい、新潮文庫版の解説を書いた江藤淳は、「私は(ヒロイン)白川倫のモデルが作者の近親であることを疑わない」と言い切っている。したがって、『女坂』にはいくつかの実話が埋めこまれていると考えてよいだろう。物語の背景は明治17・18年から大正初期にかけての東京であって、藤沢周平(1927-97)の分類によれば、人間を描く部分に重点がある真分数型の歴史小説に相当する[藤沢 1995:141]。ここに当時の高等官士族における妻妾同居の1パターンが描かれているとみなして、娶妾習俗考察の補助資料としたい。

主要な登場人物を紹介し、かたがた相互の関係に言及しよう。まず、元熊本藩の小禄の家に生まれた白川行友は、刑吏からのし上がって福島県令川島通明(三島通庸か[註1])の腹心となり、県大書記官として自由民権運動の弾圧に狂奔した。彼は女にかけては放埒であったが、敏腕で男ぶりがよいので妻には充分魅力のある夫であった。川島が警視總監として東京に移ると、白川も警視庁に転勤し一等警視として幅を利かせた。ところが川島總監が50歳そこそこで脳溢血のために急逝した後、庇護者を失った白川は西洋流の法律論を操る若い官

僚の抬頭に抗しきれないものを感じて、憲法発布後間もなく官界を辞する。既に、余生を養うに余りある富を在職中に蓄えてあったのである [円地 1961:15,33,81-82]。

元熊本藩の下級武士の娘である妻倫は、数えの14歳で、一回り上の同じ辰年生まれの行友(1844年生?)に嫁し、翌年に道雅、ついで悦子という二人の子どもを生んだ。まだ福島にいた頃、九つになった悦子を連れて夫の依頼で妾探しに上京し、身代が傾いた石町の竹の皮屋(註2)の一人娘・肌が白い縹緖よしの須賀を見付け、写真を夫に送って承知の返事をもらい、身の代や支度料に500円もの大金を親に渡して連れ帰った。主人づきの小間使いとして一生奉公するとだけ言い含められていた須賀は、大柄な身体つきながらまだ15歳で、本当に女にもなっていないかった[同上:5-27,35]。他方、白川は40を超えており、倫は30になったばかりであった。妾探しを倫に委任した白川の言い分はつぎの言葉に要約されている。

「妾というといやに表立つが、お前にも小間使いだ……よく仕込んでお前が交際で外へ出るような時にも安心して委せて置ける性質のいい若い女がうちにいるのもいいじゃないか。だからおれは芸者などうちへ入れて風儀をわるくしたくない。お前を信用してお前に一切委せるから、若い……出来るならおぼこな娘がいい、そういうのをお前の眼鏡で探して来てくれ。費用はこの中から使ってくれ」[同上:16-17]

倫は美人ではないにせよ十人なみの縹緖で身だしなみもよいほうだったが、教育も芸ごともろくろく身につけず早く結婚してしまった上に、夫と家とを大切に思う道徳できびしく自分を縛ってその責任をいつも重く担っているの、年増盛りの女に見られる熟れた肉感など薬にしたくもなく、十以上も若いはずの妻が白川には時に姉のように見えることがあって、そうした強さが煙たくなじめないものになっていたのである [同上:15-16]。ようやく読書ができる程度の倫は、既成の道徳以外に頼る楯がなく、夫の無理にも背けずに妾を求めてきたのであったが、自分と夫との間に小娘が割り込んでくることを公然と認めなければならぬ辛さに身を焼かれ、こうした苦しさを妻に与えて平気である夫は地獄の鬼のように無情に思われた [同上:44,30]。

倫の留守中に白川は手廻しよく三間の新座敷を建て、須賀が来るとまるで花嫁の衣装を揃えるように着物をふんだんに買い整えた。そして、倫の知らない間に行友・倫夫婦の養女として須賀を白川の戸籍に入籍した。新制刑法が施行された明治15年1月以降妾として入籍できなくなったため、養女として入籍することによって、表向き生家から縁を切らせ、一生、勝手に逃げ出せないようにしたのである [同上:56,60]。(註3)

行友が福島県から東京の警視庁勤めに転じた後、戸田という小大名(註4)の家老格の家柄だが維新後は貧しい暮らしに堕ちた家の、由美という上背がある16歳の美しい娘が小間使い

として白川家に入った。本人は行儀見習いのつもりでできたのだが、間もなく行友の手が付き、妾奉公の明示的な取り決めのない小間使だったことから、親との間がこじれた。しかし、これは予想通りまとまった金を渡すことで解決し、3年前に白川家に入った2歳上の須賀同様、由美も養女として入籍された[同上:57,72,108]。須賀は、「お前は身体が普通の女より弱いから無理をさせては早死にする。それで由美を入れた」[同上:66]と行友に言いくるめられていた。

行友はこのほか、須賀が入る前の福島時代に3人いた女中のうちせきという女と特別の関係をもち[同上:39]、60歳に手が届く頃になってからのことであるが、長男道雅の後妻美夜と親密な関係を結んで、彼女の死に至るまで継続した[同上:103,175]。とくに美夜との関係はこの物語を新たな展開に導くが、これらは妾として人々が認める立場の女性ではないので除外し、倫・須賀・由美の三者について、地位・役割および愛情関係をまとめておきたい。

物語がまだ福島時代を辿っている『女坂』のなかで、作者は妻妾の地位関係についてつぎのようにコメントしている。

維新前の家の掟では、妻妾の別は越えがたい階級をなしていたが、薩長の軽輩の武士が一躍して台閣の諸卿となった革命後の現在では、「酔うて枕す美人の膝、醒めては握る天下の権」は青雲の心に燃える男子の理想であって、男の器量に従って動かされる妻の地位は蔓草のようにはかないものである。[同上:52]

新律綱領の五等親図が妻妾をともに二等親としたのは、大宝令の古制を復活させたものであるが、前掲のコメントを読めば、それは、妾を持ち上げ他方妻を相対的に貶める、維新政府を牛耳った革命の志士たちの生活感情に支えられていたといえなくもない。ともあれ倫は、少しずつ開いてゆく大輪の牡丹のように、色と匂いを増してゆく須賀に夢中の夫に対して、深い不信の溝が穿たれてゆくのを覚えながら、「今の世間では田舎出の古女房を破れ草履のように郷国へかえして舞妓や芸者出の美しい女を堂々と妻にしている貴顕紳士が多い」[同上:52]ことを思い、この頃の須賀へののぼせ方では白川が何を考え、どんな策を立てて自分を追い出すように仕向けぬとも限らぬ、と不安になる。万一妾に子どもでもできたらどうであろうと時に慄然とするが[同上:51]、夫の愛情を頼りにせず、辛抱強い意志の力でこの家の妻としての位置を支えるようになってゆく[同上:119-120]。

家庭生活にはそれでも妻妾の差別があった。由美が妾奉公10年の後に白川家に入出入りする倫の甥の嫁になって出ていってからの、妾は須賀一人の時期の食事時の膳の向かい方に、白川家での須賀の位置が鮮明に示されている。家人全部の目が注ぐ一座の中央で、主人と一つ膳で向かいあって箸を動かす須賀に、侍妾の姿が白昼暴露されるからである。

行友を上座に、倫、鷹夫〔道雅先妻の子〕……長男の道雅や妻の美夜その子供たちが別宅から来ている時は又その順序で一人一人坐った前に、溜塗りの膳が一つ一つ運ばれ給仕人の女中は座敷の真中に飯櫃を置いて坐るのである。須賀の膳は別に配られない。須賀は女中に背をみせて行友の膳の向う前に坐り、行友の飯をつけたり魚の身をむしったり世話をしながら、自分の菜も同じ膳の上に載せてお取膳で食事をすますのである。〔同上:136〕

二人称の呼び方にも主従の別があった。妻たちは倫を「奥さま」と呼び、倫は「須賀や」「由美や」と女中同様に呼んだ。もし書生が諂って妾を「奥さん」と呼ぶのを耳にすると、倫は「須賀のことを奥さんというのは止めて下さい。このうちで奥さんは私一人なのでから……言葉が乱れると、うちの取締まりがつきませんからね……」〔同上:135〕と穏やかながら凜とした姿勢で注意した。妻妾同居で主人の愛情が妾に集中している白川家の秩序は、妻・倫の意志の力で保たれたのである。

妻妾同居によって、妻の包括的な役割のうち若干のものが妾に割譲ないし委譲される。妾はなによりも夫のセックス・サーバントとして家に入ったのであるから、妻は例外なくこの特権の一部もしくは全部を夫の権力によって妾へ割譲せしめられる。白川は須賀が到着すると彼女の寝間がある新座敷に早速自分の床を敷かせ、須賀に夢中になってからは倫の部屋に足踏みもしなくなった。由美が加わってからは彼女も須賀と同じ新座敷に住ませ、夜は交々自分の寝間に来させた〔同上:40,51,65〕。倫は、「二人の若い愛妾を垣根にして、いつか行友と肉体で結ばれることがなくなってしまった」〔同上:91〕。由美が去って妾一人となつてからは、須賀は行友の寝室へ自分の床を敷いて寝るのを常とした〔同上:136〕。倫はセックス・パートナーとしての妻の役割を40歳になったばかりで全く放棄させられたが、妻たちについて子が生まれることのなかったのは救いであった。

それでも、稀に倫に主人の寝間へ来るように須賀が取り次いでくることがあった。そういう時に限って外で面白くないことのあった時で、白川の気分はこじれて難しく、倫を八つ当たりの的にして、家政の切りまわしや財産の管理方について子細に問い糺すのが常であった。倫は上司に会計検査を受ける納入係のような気持ちで、布団を二つ並べて敷いてある夫の寝間へ入ってゆくのだった。〔同上:74〕

倫は行友の性の対象でなくなっても、家政の切り回しと財産の管理について、行友にとってもっとも信頼ができ、もっとも便利で忠実な「支配人」であった〔同上:120〕。財産としては、芝と日本橋と下谷にそれぞれ千坪内外の地所があって、その七分通りは家作になっていたので、地代や家賃は相当の額に上った。それだけに未払いも少なからず、倫は一月に一度は必ず自分で出かけて行って、賃貸の地所や家作の状況について差配から詳しく聞き取るの

を例とした [同上:104]。もし滞納がこじれたり係争問題が裁判になったりすれば、月の半ばは外出を余儀なくされることもあった [同上:185]。それに、日清戦争後は品川の御殿山に近い異人屋敷を買取って移転し、東京市内に2000坪に余る邸宅を構えていたから、使用人たちにも心を配らねばならなかった [同上:130]。外回りの用務を「支配人」の対外的役割とすれば、これは対内的役割、主婦の役割であった。

尾崎三良家の八重は中央政府の高級官僚の妻として夫の公的な外出や交際に伴われた [森岡 1998:112-113]。倫には夫の官庁勤めの間もこうしたことは僅かしかなかったようである。夫が致仕して白川家の家計が不動産運用に足場を置くようになってからは、倫の外回りの役割が八重の社交的役割に対応するといえよう。ただし随従的装飾的役割でなく自立の実質的役割であった。

主人のセックス・サーバントである妾は、食事時の世話に印象深く示されているように、行友の身の回りの世話を担当した。着物を揃えて着せかけたり、剃刀を使う傍で鏡を直したり [同上:68]、字を書く準備に墨をすったり [同上:109]、といった主人の手回りの用である。さらに、脱ぎ捨ての悦子の着物を畳んだり [同上:59]、道雅の後妻の婚礼のさいに花嫁の色直しの支度を手伝ったり [同上:87]、土蔵から道具類を出す手伝いをしたり [同上:109] という具合に、倫の助手もしたのである。

妾はまた縫物や料理もし、倫の留守の時は女中に指図をする女中頭を兼ねていた。書生も女中や出入りの者も、須賀のことを「お須賀さん」と呼んだ呼び名が、女中頭にふさわしいものであった [同上:114,132,135]。

以上をまとめるなら、妻の倫は家政を切り回し財産を管理する支配人であって、主婦の集団的役割に専念した。他方、妾は何よりも主人に対するセックス・サービス、身の回りの世話といった侍妾としての関係的役割を中心とし、併せて主婦の指示のもとに働く助手であり、また主婦に代わって女中に指図する女中頭であった。ここに妻と妾の間の縦横の作業分担が示されている。妾がほとんどの子産みを担ったか、子を全く生まなかったかに関連する大きな差異を別とすれば、白川家の妻妾の役割構造は尾崎三良家の実態 [森岡 1998] と大綱において変わらない。

では、行友、倫、須賀、由美四者間の感情関係はどうか。作家の想像力がもっとも活躍する領域であって、それゆえ虚構であるが、反面、もっともよく真実を穿ちうるともいえよう。この物語がおおむ30年ほどの間に感情関係にも変化があったと考えられるので、期間を限定して四者が同居した10年間を中心に、ときにその前後を含めて彼らの関係がどのように描かれているか、まとめてみよう。

須賀の目から見て、行友と倫の間に夫婦らしい暖かさは少しも感じられないが、いかに自分がそそのかしてみても行友が倫を追い出そうとは思われない。それは、行友にとって倫は

性の対象はおろか愛情の対象ですらなくとも、もっとも便利で忠実な支配人であるからである [同上:119-120]。

行友が一人称で倫との関係を語っていないのに対して、倫は一人称で行友との関係を語ってつぎのように言っている。「十数年にわたる自分の献身と熾烈な情熱を便利な下僕の忠誠ぐらいにしか受取らない心驕った放逸な夫をどうして尊んだり愛したりすることが出来よう」と [同上:53]。倫は、仕えるべき夫も支えるべき家も無慈悲に剥ぎとられてゆくなかで、娘悦子の小さい身体だけをしっかりと掴みこんで、荒れた不毛の野に必死に立っていた。倫の身を案じる郷里の母が寄こしたにじり書きの手紙の末尾の、「ただあみだ様の御せい願を一途に信じ、何ごとも如来様にお委せ申べく候」 [同上:55] という文章が、倫の心に新しい息吹きを吹き込む。

後年、行友が息子の嫁・美夜と不倫の関係にあることを初めて須賀から聞かされた時、倫は須賀や由美を行友が愛し始めた頃に味わった嫉妬とはまるで性質の違った煮えくりかえるような憤りに、身を支えかねた。それはもはや夫婦としての愛でも憎しみでもなく、須賀や由美やいや当の美夜さえも背後に囲って、手に負えぬ雄獣の行友に立ち向かう激しい憤りであった [同上:103]。亡母の教えが種となって、倫の心に小さな信仰の芽がふとふき出したのはその頃のことである [同上:147]。

つぎは妾たちである。二人のうち由美のほうが若く、家に入れたのも後であったが、行友は須賀ほどに彼女を寵愛していなかった [同上:113]。のみならず、美夜との関係が始まると、その頃60歳に手の届く行友にとって由美がむしろ重荷になってきたことも、出入りの遠縁の若者に彼女を嫁として縁づかせる事情の一つであった。由美よりも行友に愛されているはずの須賀が、この家を去ると決まった由美を相手に、「私たちは旦那さまに可愛がられても……ちっとも嫌いじゃないけれど……でも、ほんとうに年ごろの同じくらいの人と好きあったのとはどうしても違うんですね」、と言っているのが注目される [同上:122]。

夫の愛情を頼りにしないで、この家の妻としての位置を支えている倫の辛抱強い意志の力に、須賀は毎日毎夜重い石で抑えられているような敵しがたさを感じさせられ、「奥さまがいなくなってくれたら」と時々思ってみるが、その考えが起きる度に、自分ながら疎ましくなってくるのだった [同上:120]。こういう須賀であったから、妻と妾との間に渦まくと予想される烈しい嫉妬も陰湿なせめぎあいも描かれていない。そればかりか、「芝居でみても、本でよんでも、お妾って皆悪い女ばかりで、奥さんを苦しめたり、お家騒動起こしたりするでしょう。私たちはそんなこともしないし、随分真面目だったわね」と由美が語っている [同上:122]。

商人の娘、元上級武士の娘という生まれの相違にもかかわらず、二人の妾は争わないどころか最初から仲がよかった。行友の手がついたショックに烈しく泣くほかない由美に対して、

須賀は嫉妬よりも、由美と近く寄りそい抱きあって、貧ゆえに一つ運命に落ちた嘆きを嘆きあいたい思いが胸に溢れ、「お由美さん、力になりあいましょう。私のようなものでも姉妹だと思ってくださいな」と慰めた[同上:72]。妾同士嫉妬しあう筈なのに、二人とも行友と年が親子ほど違うためか、寵を争うような様子はいずれ見せたことがないことに、倫も、姉妹じみた仲のよさを家内が荒立たないでいいとは思いつつながら、去勢されたような二人の若い女を不思議に眺めることがあった[同上:110]。由美がいよいよ家を去ることになった時、「こうして十年もお妾でいられる境涯で旦那様一人のお世話をして来て喧嘩もせず仲よくいられるなんて、珍しいことだわね。きっと……前世は姉妹だったのかも知れないわ」と涙をためて云う由美に、「そうねえ」と涙に眼を潤ませた須賀も感に堪えたように云うのだった[同上:121]。

二人の妾の仲のよさは別としても、妻と妾の間の、地位役割の微妙なバランスに立つ一種奇妙な和合は、主として倫の毅然とした姿勢に負うもののように思われる。この小説の主題が、妻妾を同居させるのみか、小間使いやはては息子の嫁にまで手を出す放埒な夫の理不尽な所業にひたすら堪え、骨身を削り心を切り刻んで「仮構」の家に献身し、最期には「私が死んでも決してお葬式なんぞ出して下さいますな。死骸を品川の沖へ持って行って、海へざんぶり捨ててくだされば沢山でございます」[同上:204]、と夫に遺言した女の一生を描くところにあった。そのことを考慮すれば、倫の心と身体の悶えを克明に彫り深く写し出すことを旨とし、このヒロインの印象を弱めないために、女三人の関係の描写などは故意に比較的平板なものに止めたのかもしれない。

旧稿[森岡 1998]で取り上げた尾崎三良は、白川行友のように無軌道ではなく、妻妾とともに一人の女性として待遇した節が認められる。倫をヒロインとするこの物語は、モデルがあるといっても所詮虚構であるが、行友に対する倫の怨念ともいうべき心情は、尾崎の自伝からはついに採りえなかった正妻八重の心の奥裏を推測する手がかりを提供してくれるように思われるのである。

註

- (1) 三島通庸(1835～88)は鹿児島藩士出身の内務高級官僚。明治15年1月～17年11月福島県令, 17年11月～18年12月内務省土木局長, 18年12月～19年7月警視總監, 20年5月子爵, 21年10月死亡。
- (2) 藪から採った竹の皮の汚れを拭ったりして仕上げ、束ねて売る商売。
- (3) 明治13年(1880)元老院において廃妾の趣旨の刑法審査修正案が審議された時、これに反対して提起された存妾論の根拠の一つは、法律に妾の字がなければ妾の姦通を処罰できず、したがって妾の姦通を防ぐことができない、ということであった[福島 1962:145]。このように刑法の親属例に妾の字を残せば、妾の姦通を防ぐ効果をもったのだが、さらに戸籍に入籍させることによって妾を一生繋ぎ留めることができた。明治15年に実施された新制刑法で廃妾が実現した後は、事実上の妾の姦通まで防ぎえないにせよ、養女として入籍させることで、これを生涯主人のもとに繋ぎ留める

ことができたのである。

- (4) 「戸田という小大名」には、美濃大垣10万石の戸田氏の分家、大垣新田1万石の戸田、下野宇都宮7万石余の戸田氏の分家、下野足利1万1千石の戸田、下野高德1万石の戸田、の3家がある。

文 献

円地文子, 1961『女坂』新潮社 (新潮文庫)。

藤沢周平, 1995『ふるさとへ廻る六部は』新潮社 (新潮文庫)。

福島正夫編, 1962『「家」制度の研究』資料篇II, 東京大学出版会。

森岡清美, 1998「一勲功華族における妻と妾－男爵尾崎三良の場合－」『淑徳大学社会学部研究紀要』32号, 107-129。

森岡清美, 2002『華族社会の「家」戦略』吉川弘文館。

(Research Note)

The Wife and Concubines of an Elite Bureaucrat in the Meiji Period

Kiyomi MORIOKA

The source of the data for the present essay is almost entirely a novel *Onna-zaka* (Women's Slope) written by ENJI Fumiko and published in 1957. The data will shed a light on the phases of psychological tension experienced by the heroine whose husband kept his concubines within the same household, filling the vital gap of information which my previous papers provided in connection with the concubinage among upper class men in the Meiji period.